スウェーデン便り（12）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝2000年2月8日

［本文］

一月の後半、トーヴェ（陶兵衛と発音した方が近いようだが……）が城を出た。ティダホルムの街の中に、学生アパートを借りたという。毎日、少しずつ荷物を歩いて運んでいたようだ。手伝おうかと訊（たず）ねたら、「もう、あらかた終わったから」と言って、大きなザックを背中にかついで、山に登るような格好で街へ向かった。

彼女は陶芸科の二年生なので、五月にはヘリデンを出ることになる。五月はすぐなのに、どうして今ごろ出るのかと聞いたら、「一年半もスロット（城）に住んだし、一人の時間を持ちたくなったから」と言った。

しかし、本当の理由は、大学受験に向けて集中したいからだろう、と私は推察している。年が明けてから、大学を受けようと思う人たちの動きが、かなり活発なものになってきている。

ただ、受験といっても、日本と全く違うのは、受験日というのがあるわけではなく、五月の締め切り日までに、いくつかの指定された枚数のデッサンや絵などを、必要な書類と一緒に送るだけである。

ただし、課題というのがあって、例えばストックホルムのコンストファックの場合、セラミックの受験生はコショウ入れをデザインして送らなくてはならない。グラフィック・デザイン科は、若い人向けの聖書をデザインするという課題である。

トーヴェは、去年の暮れごろには、再びモスクワ大学へ留学してロシア語に磨きをかける、と言っていたのだが、学生アパートでコショウ入れをデザインし始めたようだ。

教室では、持ち運べる窯というのを作っている。組み立てれば、どこででも窯が焚（た）けるというわけで、直径二メートル、高さ一メートル五十センチくらいの、大きなとんがり帽子のような形のものだ。それを、いくつかのパーツに切り分け、それぞれのパーツに持ち運び用の取っ手がついている。

それにしても、一人が両手に一つずつ持つとして、何人必要なんだろう。トーヴェのことだから、何回も行ったり来たりして、自分で運ぶのだろうけれど。

さて、仮に面接まで進んだとしても、アートクラフトの場合、自分の作品などを前にプレゼンテーションをしなくてはならない。自分が何をやろうとしているのか、といったことなどを説明、発表する。

トーヴェの場合、ダーヴィッドのように、最初から大学に目標を据えてやってきたわけではなく、プレゼンテーションもうまいわけではない。何カ月もかかって、数枚のデッサンを仕上げても、先は見えないのである。

ただ、この時間のかけ方が、いかにも、この国のやり方という気がする。今年の八月

末ごろ、彼女がどこで何をしているのか予測はつかないが、いくらでも、やり直しの利く国だから、心配することはない。

《注》コンストファック＝スウェーデン最高の芸大。